

「ミュータンス星の陰謀を打ち砕け」

たくや君はたんぼ幼稚園の年長さん。歯磨きが、あまり好きではないようです。お母さんからは、

「来年は一年生、自分でも、ちゃんと歯磨きできるようにならなくてはいいけないよ。」

と言われていますが、面倒くさくてさぼってばかり。この日も「飯やお菓子をお腹一杯食べた後、歯磨きせずに寝てしまいました。

食べ物かすが沢山ついた、たくや君の口の中、今夜は何やら事件が起こりそうな気配ですよ。

たくや君が生まれて半年位経った頃、そう、乳歯が生え始めた頃から、たくや君の口の中には、目に見えないほど小さな『歯の妖精』が住みついていました。その妖精たちは毎晩、たくや君が眠ると動き出し、たくや君の歯が、きれいで丈夫になるように魔法のモップでお掃除していたのです。そしてこの夜も…

「ホワイティ、その歯には、もうモップかけた？」

「かけたわよ。キラリこそ、奥歯には、もうかけ終えたの？」

「奥歯はクリーンの仕事だよ。クリーン！」

「まださ。今やっているとこだよ。」

「お前は本当に仕事が遅いな。」

「何言ってるんだよ、キラリ。奥歯は溝も多くて、モップがけが大変なんだぞ！それにたくやの奴、全然歯磨きしないだろう。溝も隙間も食べ物かすがいっぱいさ。いくら魔法のモップだって、一晩じゃ、きれいにしきれないぜ。それにな…、うわっっ！」

「クリーン、どうしたんだよ？」

走り寄ってきたホワイティとキラリが、クリーンの指差す先を見ると、そこには紫色の

まん丸な体に黄色い斑点のある変な生き物がいました。よく見ると、白いお腹についている又ラ又ラした、たらこのような唇で、たくや君の奥歯に吸い付いて、もごもごと動いているではありませんか。

「何だ、こいつ。」

薄気味悪いその姿に三人は思わず眉をひそめました。

「はあく、ここは汚くて居心地がいいねえ。」

突然その生き物がしゃべりだし、「ゴロゴロと転がりながら、三人の前までやってきて止まったかと思うと、キンキン高い声で言いました。

「オレ様はミュータンス星の王子、コッカス様だ！ヒッヒッヒー！」

「えらそうに、何いばってんだ。こいつ。」

キラリがバカにしたようにフンと鼻を鳴らしました。

「で、その何とか星の王子が、たくや君の口の中に何の御用？」

とホワイティが言うと、

「はっはあ！今に分かるぞ！」

コッカスは、たらこ唇を曲げて、ニヤリと笑いました。その口元から見えた歯は全部むし歯で真っ黒でした。と、その瞬間、プーンという音と共に、どこからともなく、何百という数のUFOが、たくや君の口の中にワープしてきたのです。その真っ黒いUFOが、たくや君の口の中を飛び回る様子は、まるでバイ菌をまき散らしているかのようでした。

「なっ、何だよ、一体！」

クリーンは黒いUFOを必死によけながら、コッカスに向かって叫びました。コッカスは答えます。

「はっはあ！ここに我々の新しい王国をつくるのさ。オレ様が地球にやってきたのはな、地球の子供たちの歯を全部むし歯にして、ミュータンス星人に変え、地球を征服するためだ！」

「そんなこと、僕たちが許さない。」

三人はコッカスに魔法のモップを向けました。「そんな物で、このオレ様を倒せるもんかいでよ、レンサー！」

「シヨーツシヨシヨシヨーツ、トーツ！」雄叫びと共に現れたのは、見上げる程大きな紫とピンクの縞模様の怪獣でした。

「これはオレ様のペットのレンサーさ。レンサーこいつらをやっつけてしまえ！」

「シヨーツ！」

レンサーは白くネバネバしたものを三人に向かつてはき出します。三人が危うく身をかわすと、そのネバネバはたくや君の歯にくっつきました。するとどうでしょう。みるみるうちに、その歯が溶けていくではありませんか。

「レンサーのウシヨックビームはすごいだろう！歯磨きもしないこんな奴、早く見捨てて逃げた方が身のためだぞ。」

「そんなこと、できるもんか！」

キラリが言つとホワイティ、クリーンも後に続きます。

「みんなで魔法の力を合わせて、レンサーを攻撃するんだ！」

「よし、やってみよう！」

二本の魔法のモップがレンサーに向けられました。

「いくわよー！」

ホワイティの合図で、みんなが一斉に呪文を唱えます。

「白い歯、強い歯、きれいな歯！」

モップの先から、白く輝く光がほとばしり、レンサーのお腹ではじけ散りました。

「シヨーツ、トーツ！」

レンサーは苦しい声を残し、ポンッと消えてしまいました。

「うー。よくもオレ様の可愛いレンサーをいじめてくれたな！次はそう簡単にはいかないぞ。行けっ、ソプリンたち！」

コッカスがそう言つと、飛び交わっていたUFOの中から、ものすごい数の生き物が這

い出してきました。それは赤いイボイボができた黄色いミミズのような姿をしており、頭の方には鋭い歯がついていました。そして、たくや君の歯に巻き付いて、その鋭い歯をつきたてて、バリバリ食べ始めたのです。

「早く何とかしなくっちゃー！」

三人の妖精達は、歯に巻き付いているソプリンを引き剥がそうと、必死で引っ張りました。

「こしゃくなーまだオレ様の邪魔をするのか！」

カンカンになったコッカスは三人に向かって、口から無数の黄色い糸を吐き出しました。糸はみるみるうちに妖精達を絡め取ってしまいました。

「はっはあ！オレ様の勝ちだ。こいつらUFOの中に閉じ込めてしまえー！」

朝がやってきました。たくや君は、歯が痛くて目を覚ましました。鏡で口の中を見ると奥歯に穴が空いているではありませんか。たくや君は、その日お母さんに連れられて歯医者さんに行きました。歯医者さんはたくや君の口の中を覗いて言いました

「大変だ、たくや君。君の口の中はミュータンス星人に乗っ取られているね。」

「ミュータンス星人？」

「そうだよ。地球の子供達をむし歯だらけにしようとする悪い奴さ。それに君の歯を守る妖精達は捕まってしまったみたいだ。今日はがんばって治療して悪者を追い払い、妖精達を助け出してやろうね。」

たくや君は強く頷きました。

歯医者さんの治療が始まると、ソプリン達はシューッと音を立て、あっと言う間に干からびていきました。黒いUFOは次々に砕け散り、妖精達は無事に解放されたのです。でもコッカスはというと、あっ！一機残ったUFOに乗って、今たくや君の唇から飛び立とうとしている所でした。

「はっはあ！オレ様は不死身さ。また歯磨き

の嫌いな子を探して旅に出るんだ！じゃあな！」

そう言うところカスはどこへともなく姿を消してしまいました。

こうして、たくや君の口の中はすっかりきれいになりました。でも、大きな穴が空いてしまった三本の奥歯は、もう元には戻りません。

「お母さんから貰った大切な歯だったのに……」

ホワイティは悲しそうです。するとそれに答えるように歯医者さんの声がしました。

「むし歯はちゃんと治療すれば大丈夫。でも、これからは、しっかりと歯磨きして、むし歯を作らないようにしなくっちゃね。乳歯は大人の歯が生えてくるまで、とても重要な役割をする歯なんだよ。そしてこれから生えてくる大人の歯は、たくや君がおじいさんになっても使う歯さ。もっともっと大切にしなければいけないよ。」

「はい。ぼく、今日からちゃんと歯磨きします。妖精さん達にも約束するよ。」

たくや君が言うところの妖精達は、にっこりと顔を見合わせました。

きれいになったたくや君の口の中。妖精達は……いました、いました。でも仕事が減ってちよっぴり暇そうですね。あれっ。クリーンがキラリとホワイティを手招きしていますよ。そう、妖精達がうれしそうに見つめていたのは、少しでも顔をのぞかせた、たくや君の新しい歯だったのです。